

世界エイズデー (12/1) に因んで



琉球大学大学院医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学講座 仲村 秀太

はじめに

今年も世界エイズデー (12/1) を迎える季節となった。世界規模でのエイズ蔓延の防止、HIV 感染者に対する差別・偏見の解消を目的とし1988年に世界保健機関により定められた日である。本邦は世界の中でHIV低流行国という位置づけであるが、毎年1,500人程度の新規患者が報告されており国内で約1万5,000人の患者がHIVとともに生活をしている。本県においても患者数は増加しており2007年以降、人口10万人あたりの患者数が全国3位以内を占めている。

抗HIV薬の多剤併用療法 (いわゆる Highly active antiretroviral therapy ; HAART) の登場によってHIV感染者は非感染者とほぼ同等の平均余命を送ることが可能となりHIV感染症は慢性疾患として長期療養を送る時代となった。しかしながら、多くの日和見感染症が克服されてきた一方で21世紀に入りこれまでとは全く異なる問題が新たに出現している。また、HIV/AIDSが患者や社会に与えるステイグマ (烙印) に関しては未だ完全に解決されてはいない。本稿ではHIV/AIDSの最新の話題や当院でのHIV診療活動について触れていきたい。

1. Acquired immunodeficiency syndrome から Acquired Inflammation Disease syndrome へ

近年のHIV/AIDSに関するリサーチで最もトピックなのはHIV感染に伴う慢性炎症がもたらす様々な合併症である。欧米での大規模なコホート研究の結果からHIV感染者は非感染

者と比較して脂質異常症や糖尿病などの代謝性疾患や心筋梗塞などの動脈硬化性疾患、さらには悪性腫瘍の罹患率が高いことが明らかになってきた。この背景には抗HIV薬の有害事象という側面やHIVそのものが動脈硬化促進に関わっているという事実があり感染者におけるバイオマーカー (高感度CRPやIL-6、D-ダイマーなど) の上昇がその裏づけの一つとなっている。当院通院中の患者においても大部分の患者に脂質異常症を認め、心筋梗塞や脳出血といった血管障害もすでに経験している。

また、COPDや骨粗鬆症などもその有病率の高さが指摘されている。当院通院中の男性HIV感染者を対象とした症例対照研究では人間ドック受検者と比較して、より若年から閉塞性換気障害を有することが示された (第23回エイズ学会、名古屋、2009年)。年齢中央値が40歳 (25~67歳) の当院通院HIV患者75名において、骨粗鬆症のバイオマーカーである尿中DPDは約24%で異常値を認め、骨塩定量では約20%に骨減少症を認めた (第24回エイズ学会、東京、2010)。さらに、HIV感染に伴う認知機能障害についても本学教育学部と共同研究を開始している。このように、HIV/AIDS診療は感染症を取り扱うというより幅広い内科領域全般をフォローアップせねばならない状況へと変化している。本県においても今後ますます複数診療科との連携が求められることになるであろう。

2. 全県体制での診療システム構築

筆者が平成19年に国立国際医療センターエイズ治療研究センター (ACC) にレジデント

として在籍していたときに、ある患者からこんなことを言われたことがある。「先生方はHIVは慢性疾患だ長期療養の時代だというけれど、同じ慢性疾患である肝炎とは社会の受け止め方が全然違うじゃないですか。病名を言えない、受け入れてくれる病院も限られている。長生きできるようになったことはその間に糖尿病や腎障害などのさまざまな疾患を合併するという。でも、透析になったからってHIVであることを理由に受け入れてくれない病院がたくさんある。肝炎ではこんなことありますか？」実際に透析を経験している当事者の言葉にハッとさせられた。

本県では、エイズ中核拠点病院の本学および拠点病院である県立中部病院、県立南部医療センターとともに診療体制の構築につとめてきた。前述の脳出血の患者の例をあげると、そのリハビリ療養のために患者受け入れを快諾していただいた施設へ出張講演を行い受け入れ態勢を整えた。また、離島で生活する患者はそのコミュニティの狭さから地域の医療圏へアクセスすること自体に困難を感じる。そのため離島協

力病院に対しても患者受け入れに対する出張講演を行ってきた。

患者自身の長期療養を支援するために季刊パンフレットの作成や患者同士のピアカウンセリングを目的として臨床心理士が中心となった県内初となる陽性者交流会も今年度開催している。このような活動がHIVに対する社会的スティグマの軽減につながればという願いが県内各拠点病院のHIV診療チームの願いである。

おわりに

今年の世界エイズデーのキャンペーンテーマは～Keep the promise, Keep your life～である。HIVに感染しても仕事をやめることはないし生活も続けられる。治療の進歩は安心して検査を受けられる条件を整え予防対策にも貢献している。エイズに取り組み続けたたくさんの人がいてここまできた。社会の理解が広がり、関心を持つ人が増える。治療も予防もそのことに支えられている。そんな願いがこめられている。最後に、執筆の機会を与えていただいた県医師会の関係諸氏に深謝申し上げます。



平成22年度「世界エイズデー」ポスターコンクール最優秀賞受賞作品